
怠情少年期

晴英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怠惰少年期

【著者名】

晴英

【Zマーク】

Z0189J

【あらすじ】

アホな高校生4人が、毎日じょーもない事件をひきおこす…
バカなことで必死になつて、それでも僕らなんとか楽しく生きてます！

煙草片手の日常コメディー、ときどきちょっとした恋愛事情も展開中。

いかに楽しく生きていくか。（前書き）

赤いマルボロ

Seven Starsの14mg

赤のラッキーストライク

中南海とさばじきマルボロメンソールライト

癖があつてなんぼ。
煙草はおやつです。

しうもないつていうな。
僕ら必死に生きてます。

いかに楽しんで生きていか。

1.

高校に入つてから、コロッケパンを食べる機会がめっきり減つた。中学の頃は学校に売りにくるパン屋さんの商品の中ではコロッケパンが一番すきで、ほぼ週3ペースで食べていたものだが、最近では全くと言つていいほど口にしていない。

その主な理由は、高校の食堂のコロッケパンには余計なドレッシングがかけられているからとのと、更にわたしがラーメンという贅沢品の味を覚えてしまつたから、といつゝことである。

決してコロッケパンに飽きたわけではない。

聞けばちかじかのコノビニのコロッケパンにもマヨネーズや「アーモンドレッシングやらがたっぷりかけられているやつじやないか。わたしはどうしてもそれが許せないのだ。

何度も書つたが、本当にコロッケパンに飽きたわけではない。ドレッシングでべちゃべちゃにされたコロッケパンの現状を嘆くわたくしに、ラーメンが甘く囁いただけだ。

しかし高校の食堂のラーメンはなかなかおいしい。もう食堂に通いつめて2年になるが、入学当初から変わらぬ味・値段、気付けば週5でラーメンの時もあった。
(コロッケパンの時といい、なんて偏食だらう)

そんな生活ばかり繰り返したものだから、今日のよつな、ラーメン売り切れ、の文字はひどくこたえる。

ちょっと待ってくれ。

委員会で遅れちゃったんです。でも今日は朝からラーメン食べようと思つて学校来たんです。

ラーメンなかつたらわたしはなにを食べたらいいんですか。
朝起きたときからラーメンを食べるつもりでいたのに今更カレーパンなんて食べられません。

お願ひします、ラーメン作つてください。
本当にどうしたらいいんですか。

ラーメン、わたしのラーメン。

いくら哀願しても無いものは無いのだ。

大きく息を吸い込んで、そのまま食堂を出た。

吸い込んだ息を漏らさないよう東校舎の屋上まで駆け上がる。
錆び付いて、あける度に大きな音を立てるドアを少し荒っぽくあけ
ると、ドアの小さな枠の向こうに白い空がひらけた。

てつくり青い空が見れると思つていたわたしは、思いがけない白さ
に、ため込んでいた息を少し漏らしてしまつた。

なんだ、と思いかけた時、視界が明るくなつて、見たかった空が顔
を出した。

大きい雲が通りすぎるとこだつたらしい。

それに安心して、貯水タンクの裏の、ほびよべ口の当たる場所まで歩いた。

実はよくくる場所だ。

ほかの誰にも教えていない。

このひだまりは、わたしのものだ。

タンクにもたれて、隠していたコートの空き缶を引っ張り出した。妙な重量があるとおもつたら、だいぶと灰がたまっている。うそだらう、だって3日前に缶を変えたばかりなのに。おかしいな、とおもいつつも、今現在問題はないのでそのままコートの缶を右側において、セブンスターに火をつけた。

ヤー臭い匂いが瞬間鼻について、それをそのまま肺に押し込んだ。その間も煙はゅらゅら空に上った。

口から煙を漏らすと、それもゅらゅらゅらゅら飛んでいった。

昼ご飯を食べ損ねたお腹が派手な音をたてる。
仕方ないな、今日はもつ食べないでいいや。

少しでも空腹を紛らわすために煙をむかぼる。
肺に入れて、出して、そうすれば少しの満足感がうまれる。
癖のある匂いがカツターシャツに染みこんでいく。

屋上から見るさわやかな空色と不自然な煙が溶け合つ絵はシユールだ。

この上なく贅沢な景色。

きっとこの贅沢を知ってる人間は少ない。

わたしは間違いない、しあわせもの、だ。

こみ上げてくるあぐびを噛み殺すのは好きじゃない。
くあつと大口で酸素を取り込んだ。

途端に、ガタガタと音がした。

タンクの向こう側だ。

うわ、まづい、

あまり意味はないのに体を縮こまらせた。

「あれ、缶ない。」

「じゅわったかなあ、とじんやうそタンクと壁の隙間を探つている。

その間におりとましょつと、低い体制のままじそこそ動いていたわ
たし。

本当に今田は厄田だ。

鞄の紐がコーラの缶をひっかけたようで、見事な音を立てて缶が倒
れた。

缶の上に乗せていた100円ライターももちろん放り出され、二
段階で音をたてた。

飲み口からはたまつた灰がこぼれた。

コンクリートに散らばった灰を片付けるのは面倒だ。
それ以前にもうこれ見つかつたら言い訳できないな。

「缶そつちか。」

声の主がこっちに回つてくるみたいだ。
もういいや、と思って、最後の一本のセブンスターを取り出して、
放り出されたライターを拾つて火をつけた。

ひょいっとタンクの横から顔を出したのは、藤澤くんだった。

「あれ、浅木さんセブンスターなんだ、意外。」

藤澤昭仁、「同じクラスで保健委員でも一緒。

しまった、よりもよって藤澤くんに見つかった。
と、思つたら、なんか、違う。

よつこいしようたう、とわたしの横に腰をおろすと、ズボンのポケットから小さい箱を取り出した。

赤のラッキーストライクだつた。

それから胸ポケットを探ると、やべ、と小さく呟いた。

彼になにがあきているかはだいたいわかる。

「あの、火つかう?」

「つかうつかうつかうー。」

勢いよく何度も頷いて、それでもわたしが差し出したライターは、一瞬に両手で受け取つて、

ラッキーストライクに火をつけた。

慣れた手つきだった。

「灰落ちてるよ」

ラッキーストライクをくわえた彼が少し慌てて言つた。

気づくとわたしの最後の一本はほとんど灰になつていた。
コンクリートには、やつさぶちまけた灰に加えて、今落ちたものが
散らばつていた。

もつたいないな、とコーラの缶を立たせて、短くなつてしまつたセ
ブンスターを押し込んだ。

その間も藤澤くんはおしゃれにラッキーストライクをくわえてい

た。

もしかしたら彼ことつて煙草はおやつなのかもしれない。

セブンスターよりもよっぽど癖のある匂いに、吸ってもいないうに酔ってしまう。どうだ。

「浅木さんこいつからいい使つてる?」

彼のその質問には、俺の場所とりやがつて、みたいなことが含まれているんだろうか。
でもビジョナーナ言こ方ではない。

一年前ぐらいで答えると、僕もそれぐらい、と返ってきた。

「なんで今まで会わなかつたんだろう。しかも同じ缶使つてるし。

「

「『あん浅木さん、もひひとつ来るんだけど、いい?』

「『あん浅木さん、もひひとつ来るんだけど、いい?』

彼のラッキーストライクをじっと見ていた私が、いいよ、と答えるのと、錆び付いたドアが音を立てるのはほぼ同時だった。

ぺたぺたとサンダルをひっかけた足音がとまる。また見覚えのある顔があった。

「なんだ、浅木も一緒だったのか」

先に口を開いたのは沖田だった。

斜め掛けにしていた鞄を取つて、藤澤くんの隣に座つた。

「沖田、260円」

わたしの言葉に、沖田はあり得ないほど顔を歪めた。

「お前、あれぐらい奢れよ」

「借りりんつて言つたのはあんただろうが。」

けち、と小さな悪態をついて沖田はポケットをまさぐつた。

実は、沖田とはもう半年ぶり、この場所を共有している。

最初はこの場所は俺のだと言い張る沖田に立ちはだかり命令を出されたが、頑としてわたしも退かなかつた。

こんなに気持ちいいひだまりは他にはないのだ。

そのうち言こと合つのも面倒になつてきて、一緒に使ひことにした。
よく考えれば最初からそつすれば楽だったのに。

それから数え切れないほど「」で一服したりしているのだが、大概
わたし一人で、一緒になるとしてもせいぜい沖田か一つ下の吉田く
んだったから、てっきり煙草族はわたしを含めて三人だと思つてい
た。

まさか藤澤くんもそうだったとは。
いや意外。

きっとわたしが知らなかつただけだろうけど。

でも藤澤くんつていつたら、具体的なイメージが浮かばないから。
「」でどんなことをしてゐかも見当つかない。

だからこそ、そういう彼に興味がわくのだ。

もしかしたら彼がお箸を持つのを見るだけでもわたしは不思議に感
じるかもしれない。

そういうやひとつだけ彼についてわかることがある。

藤澤くんは焼きそばパンが好きらしい。

それもわたしのラーメンやコロッケパン並みに。

わたしがそのことを知っているのは、彼が食堂で焼きそばパンを頬張るのをよく目撃するからだ。

「あれ、2人ともだち？」

珍しく驚いたような顔をして、藤澤くんが言った。

わたしがうん、と答える前に、沖田が無言で頷いた。

「そつかそつか。沖田から浅木さんの話は聞いたことなかったから、知らなかつた」

「別に話すこともねえだろ」

「吉田の話はするのに？」

「なんかそれ俺がキモチワリイ感じな言い方」

沖田がぱりぱりと藤澤くんのスリッパにわたしがぶちまけてからほつたらかしにされていた灰を降らせた。

藤澤くんがさつと払うとまた同じところに新しい山ができる。地味だがたちの悪い嫌がらせだ。

それでも藤澤くんは笑顔を絶やさない。

いつもやうりしいが、絶対に怒らないし泣かない。

それは、実は彼はどこぞのお釈迦様で、悟りをひらいていらっしゃるからだというありがたい説もあつたぐらいだが、それはいくらなんでもないだろ？

ただ彼のそういう穢やかで穏やかな雰囲気と、ラッキーストライクの匂いはとても合つてゐるとおもう。

癖があつてますぐ。

手招きするのに、何も擱ませない。

ほんの一瞬、

まるで彼自身が、その煙草のよひだと思つた。

わたしにきつちり260円を返済して、ひとしきり文句を並べた後、沖田は藤澤くんに向ひ側に腰を下ろした。

カチ、と聞き慣れた音がして、それからすぐ新しい煙が上つた。

ラッキーストライクの匂いにやつと慣れたわたしの鼻を殴るような、あくの強い匂いがする。

わたしがこの匂いに耐えきれなくなるのと、くせえ、と吸つた本人と藤澤くんがぼやくのはまったく同時だった。

「終、臭い、あつちいけ」

あからさまに迷惑そうに鼻をつまんで、ペッ、とあちこちの手振りをする藤澤くん。

なんだだよ、とこせけながりぱりこむへる沖田。

冗談にしろ本氣で臭い。

「何吸つてんの、それ。」

そう聞くと、沖田はポケットからひしゃげた箱を取り出して、別に普通ですかびね、を見せた。

いつもの赤マルだった。

だったらなんで、と口を開けたとき、沖田の後ろから知った顔が出てきた。

「すいません、臭いの俺です。」

吉田くんだ。

彼の胸ポケットから中南海のジャケットが見え隠れしている。とても楽しそうに彼は申告したが、正直臭いのはこいつだけじゃな

い。

「みんな臭えなあ。」

藤澤くんもわかつてゐるのだ。
灰を落としてまたそりぼやいた。

いや藤澤くんだけじゃなくて、みんなわかつてゐる。

臭いのは自分だつて」とびっくり。

よつやく鼻がなれた頃、吉田くんを混ぜて煙草パーティーが始まつた。

他人の煙草をもらつて吸つてみては、やれ臭いだの、やれ味がないだの、品評会のようなただのバカ騒ぎだ。

コーラの缶が一杯になつた頃には、空腹だったのもすっかり忘れていたし、いつのまにか昼休みも終わっていた。

いろんな匂いが染み着いたカッターシャツは、それはもうくさかつた。

吉田くんがトイレに行っている3分間で、屋上タンク裏で小会議が行われた。

散々バカ騒ぎしたあとに気づいたのだ。

今日の吉田くんの煙草が中南海で、いつもどちらがいつとい。

なんだから、と最初に言い出したのはわたしが、

浮氣説を立てたのは沖田。

それに尾ひれをつけたのは藤澤くんだ。

「だから、まきちゃんが2人目なんだろ。」

「僕は3人目だって聞きました。」

「え、じゃあ、かなちゃんが2人目?」

「誰だよ、かなちゃんと。」

「1・3の髪長いかわいい子」

「じゃあ、そのかなちゃんが2番目、先週別れたといつまきちゃんが3番目、一つ上の加藤先輩が4番目の女ってことだ。」

藤澤くんのまとめに沖田とわたしは納得して頷いた。
でも沖田はすぐまた首をひねった。

「それで、本命は誰だ」

そこが問題だ。

まきちゃんと付き合っていた頃の吉田くんの煙草は、煙草嫌いのま
わちやんの為に、匂このつまにくじマルメラだつた。

別れたという噂が立つてからも、まだ未練があるのか、メアドは変
えても煙草だけは変えずにマルメラだつた。

そんな彼がいきなり、

あの臭い中南海に変えたのだ。

新しい女の出現に違いない。

そう踏んで、何人かいる彼の”彼女ストック”をならべてみるのだが、本命だけがどうしてもわからない。

「藤澤くんは誰だと思つ?」

「そうだな、…案外まったく新しい女、…クラブシンガーのトモコ
ちゃん。22歳 162cm 50kg 上から89 56 85」

「ひつひと話す藤澤くん」沖田とわたしまじまじと黙然として、ふと氣づくと沖田が慌てふためいていた。ヤバイヤバイと口パクで必死に伝えてくるので田線をすりすりと、藤澤くんの後ろに立っても可愛らしい、まきちゃん。

「あの、慎一くんまだ来てませんか？」

「吉田は今トイレだからすぐ戻ってくるよ」

おやおしゃべり冷静に、なに事もなかつたかのように応答する藤澤くんに、ある一種の恐怖感を覚える。

「すぐに来てくれって言われたから、慌ててすりっぴんで来ちゃって恥ずかしいんですけど、すみません」

えへへ、と恥ずかしそうに笑う彼女はすりへくれて可愛らしくて、すりびんだつて全然恥ずかしくないぐらい。

確かに急いで来たのか息はあがつていて、頬も赤かった。

吉田くんは愛されている。

それもこんなに可愛い子に、こんなに一途に。あこつは大したもんだと思つた。

わざまでの談義はバカらしい、止めだ、忘れようと思つていた。

「それで、トモヤちゃんって誰ですか？藤先輩の彼女さんですか？」

まづい聞かれていた、とも思つたが、このまま藤澤くんの彼女つてことにしておけば大丈夫だなつと思つて直すと、隣で藤澤くんが口を開いた。

「違つよ。僕じやなくて、吉田の女。ていうか浮氣相手かな」

新しい煙草に火をつけようとした沖田の手から、みちやん柄のライターが滑り落ちた。

わたしは後頭部を鈍器で思い切り殴られたかと思つた。

まきちゃんは眉一つ動かさずに、

「もつ、またですか慎一くんたら

などと言つてのけた。

やひやないかな、とは思つてこたんですね。

妙な空氣の中、まきちゃんは少しづつ話し始めた。

「最近慎一くんメールすぐに返してくれないし、5分おきに電話しても、全然出でくれないくて。

携帯もロック掛かってて、あ、それは別にどうないことないんですけど、メールボックスも着信履歴も全部真っ白だったんですね。だから問い合わせることもできなくて、どうしてやろうかと思つてたところなんですね。」

でも証拠になる話があつて良かったです、と可愛らしい笑顔を見せたまきちゃんに、背筋が凍る思いがした。

沖田はかすかに震えている。

具体的に吉田くんはまきちゃんに”どうされる”のだらう。わたしたちは明日いつもどうり彼とえるのだらうか。一抹の不安は頭をよぎつただけで終わった。
別にどうでもいいかと思い直したからだ。

「吉田遅いね、電話で呼びつけようか。」

悪魔はこの状況を楽しんでいる。
心なしか声が弾んで聞こえる。
空は青い。

ガタガタと立て付けの悪い音が聞こえると、タンクの影からひょこつと吉田くんが顔を出した。

銀縁メガネに太陽光が反射して、キラキラ光っている。

「まき、もう来てたんだ」

わたしたちの中にもあわせやんを見つかると、途端にすこし優しい顔つきになった。

メガネの輝きにも青い空にも負けないほどの光る笑顔だ。
しかしこの男、妙な雰囲気に気付かないのだらうか。

慎一くん、どうしたことばやこいで、あわせやんは腰を上げた。

その小さな所作にもこちこち決田はびくしていった。

わたしは久しぶりに背中を変な汗が流れるのを感じた。

「慎一くんは、私とトモコちゃんど、どちらの方が好き?」

眉を下げて、スカートの端を握りしめて、搾りだしたような声でまわせやんが問う。

問われた吉田くんは、ポカンとしていた。
まるで身に覚えがないかのように。

しかしそうに2、3回瞬かずると、あわせやんの身體に合わせるよううに少し屈んで、まきが好き、と言つた。

それをきいたまきちゃんは、「まきも慎一くんが好き」と、今日一番の可愛らしい笑顔で返した。

この茶番劇はなんなんだ。

悪魔に田をやると、さつきまでの笑顔はどこへ、至極暇そう、元気そう、新しい箱のビールを剥がして、煙草に火をつけていた。

「ちょっと藤澤さん。まきは煙草嫌いなんですから、吸うならあつち行つてください、あっちー！」

それを田ざとく見つけた吉田くんは、迷惑そつにあつちけサインをだした。

藤澤くんは一警して、
へーへーと重い腰を上げた。

取り残された沖田とわたしは、田撃した一部始終を必死に頭で整理していた。

「…君ら別れてなかつたの」

「別れてないですよ。誰の噂ですか、それ」

「中南海…」

「中南海に変えましたよ。さつきから吸つてたのに今更ですか？
まきの前で吸わなかつたら、臭いのも許してくれるつて言ってくれ

たから、ね。」

沖田とわたしの疑問が、次々解決されていく。

「新しい女ができたから煙草変えたわけじゃなくて？」

「やだなあ、まきがくるのになんで新しい女ができるんですか。」

それをきいてまきちゃんは一段と顔を赤くした。 沖田くんとつないだ手を下の方で揺すっていた。
またそれに気づいた吉田くんは、つなぎ方を恋人つなぎに変えたりした。

「じゅあ慎一くんはまともやんとせなんでもないんだよね。」

「やのトモヤハヤんて誰？」

吉田くんがこっちを向いた。
でもわたしも沖田もわからない。

「よつよつ」一服から帰つてきた藤澤くんを見る。

「え、知らない。」

だつてわかつお前が、といつ沖田の抗議を聞くと、

「トモロウさんは僕の中の吉田の女のイメージ」

悪びれもなくたまつた。

でもまきちゃんはそれをきいても怒るどころか大笑いだったので、
まあいいかといつになつた。

吉田くんたちがデートに出掛けたあと、藤澤くんになんであるとも
あんな事を言つたのか聞くと、彼は、
「僕、もめ事揉ますの大好きなんだよね」
と言つた。

藤澤くんについてわかつたことがある。

彼はもしかしたら、

とても、いい性格をしているのかもしない。

反省しても後悔しません（前書き）

反省文

2 - 8 4番 沖田 栄也

僕は昼休みにベランダで煙草を吸いました。

ごめんなさい。

次はばれないようにしたいと思います。

反省しても後悔しません

放課後、特に何か用があるわけではないのに、わたしは2階廊下をふらふら歩いていた。

ああそういうば。

職員室で三者面談の用紙をもらわなきゃならなかつたことをつい出して踵を返すと、真後ろに藤澤くんがいた。

あまりに近い距離に違和感を感じるが、それ以前にびっくりして言葉がでなかつたりする。

「あ、振り向いちゃつた」

彼曰く、もうちょっと歩いたら驚かすつもりだつたらしい。その前にいきなりわたしが振り向いたものだから、彼もびっくりした顔をしている。

「もしかして、つけてるの気付いてた？」

首を横に振ると、藤澤くんはすぐ嬉しそうになんだ、と笑った。

「僕、多分またするから。」

「何言ひあるんだ。」

実は、あまりびっくりさせられるのは得意じゃない。
しゃっくりが止まらないときも、いつ驚かされるのかびくびくして
いふうちに、しゃっくりが止まつていることが多いのだ。

でも彼があんまり楽しそうに言つから、まあいいかと思つてしまつ。
宣言された分、覚悟ができるから幾分かましだらう。

「あ、そうだ。浅木さん、これから教室戻る?」

「うん、職員室寄つてからだけど。」

「そつか。じゃあ教室に終がいたら、先帰るつて言つておいてもらつていい?」

「わかった。沖田と仲いいね。」

そう言つと、彼はちょっと意外だといつ顔をして、そうかな、と言つた。

仲いいよ、と返すと、またいつも笑顔になつた。
彼のこの笑顔がどうにも好きだ。

それから藤澤くんは時間やばいから、と小走りで去つていった。
わたしもクーラーのきいた職員室を田指した。

「教室に沖田がいるから、これ追加つつて渡しておいて。」

今日はよく頼まれごとをされる日だ。

クーラーのきいた職員室で、情けなくだれている担任に紙束を渡された。

400字詰めの原稿用紙だった。

職員室を出て、またなんとなくの足取りで教室へ向かうと、廊下の

窓ガラスはどこもオレンジ色だった。

斜陽はまだ眩しいぐらいの光を放つている。

まだ沈まないつて言つよつて、

ずっとそこにあるようだ、

いつのまにか、気付いたときには沈んでしまつていてる。

こんな夕方は好きだ。

立て付けの悪い教室のドアを片手であけるのは至難の業だ。
しかしそうこうドアに限つて、力を入れすぎるともの凄い勢いで開

いでしまつもので。

「こいつも例外ではなくて、バーンと音を立てて一度バウンドしてから動きを止めた。

「「ひむせえな。もつと静かに開けらんない?」

「「じめん、片手間なのよ」

不機嫌そうに机に突っ伏している沖田に、預かつてきた紙束をばさばさ揺らして見せた。

「なにその束」

「追加だつて。」

追加のひととにあからさまに嫌そうな顔をする。
教室には沖田しかいなくて、さつきのオレンジの光が、同じよう
部屋を覆っていた。
机に近づくと、似たような紙束が積まれている。

「なにそれ、小論文?」

「ちがうちがう。反省文」

沖田はくるくるシャーペンを回し続けている。
一時わたしも練習したけれど結局出来ず終いだつたなあ、なんてことを見つた。

「なにやつたの。」

「昼休みにベランダで一服してたり、まれちやつた。」

なんでばれたかなあ、なんて言いながら、また顔を伏せた。
さらさら流れる黒髪が羨ましい。
キューテイクルがオレンジの光で輝いて見える。

そりゃあんな人目に付くといひで吸つてたらばれるだらう。

「藤澤くんが、先帰るひと言ついたよ。」

「やうなん? あ、そつか。今日あいつバイトだ」

顔は上ばずそのまま声を出すから、じゅうじゅう聞きたがる。

田線をざらりと、白紙のものよりも、黒い文字が見えた。

「僕は昼休みにベランダで煙草を吸いました。
『めんなさい。』

「音読するなよー。」

「これだけ?」

「反省してないのに反省文なんて書けませんで。
続きは浅木考えてよ。」

「僕はともに反省していくのだが、」

わたしがなんとなく口に出したことを、沖田は真剣に書き留めていく。
なんだかこれはとても面白く光景だ。

「だから次はばれなことついたこと思います。」

「それさまざら」と思いました。」

しかも宣言するんだ、と沖田は付け加えた。
でも少し戸惑って、「めんどくさいし、これでこいつを『や』といふのまま書いた。

「それで何行埋まつた?」

「うそ、3行。」

じゃあもうこいんぢやない?、と聞くと、おひ、とだけ返事をして座り直した。

「一本いかが?」

声に振り向くと、小さな箱をひつひつと向けて、自分もすでに一本銜えている沖田がいた。

全くこりないな、
沖田も、わたしも。

いただきます、と手を伸ばすと、もう2、3本しか残ってないのか、取りやすかつた。

はい、と沖田が机の上に100円ライターを滑らした。

「あれ、うせちゃんじゃない」

「うせちゃん出張中」

ぷかぷか煙を吐きながら、沖田は目を閉じて至福の時を味わっていた。

わたしはその穏やかな横顔を見て笑った。

沖田はちょっと睨んだけれど、その顔もまたかわいく見えて笑った。

わたしも沖田もなかなか幸運だ。

こんな夕方の一服が格別なことを知っているし、なにより一緒に一服できる悪友が3人いる。きっとなかなかないことなんだろう。

さつきまで眩しかった斜陽はやっぱり知らないいつか暮れてしまつて、もう外は真っ暗だ。

遠くの街灯の光と教室の蛍光灯、その間の紺色の空に煙草の煙が重なる。

窓を少しあけると、まだ熱のある空氣にのって白い煙が外に逃げていつた。

紺色に白が溶けていく。

「やつぱつマルボロの味は慣れないなあ

「そのうち慣れるだろ」

帰るか、と沖田が立ち上がる。
机の上を見ると、あれ。

「なにこれ

「かいじゅう。」

大量の折り紙。

沖田の怪獣シリーズ。

何度か授業中に折つてゐるのを見た」とあるが、すうじこ細かい。そもそも

い。

「沖田ってムダな才能あるよね」

「ムダっていうな」

余った原稿用紙が散乱している。
が、片づける気もない。

「沖田、チャリ後ろのつけて。」

「いいけどお前、ドアどんな開け方したんだよ。閉まんねえよ。」

「ひや、レール曲げちゃったんだ。じひじよ！」

「お前、女としてムダな力あるよな

「うるさいなあ。」

けけけっと特徴のある笑い方をして、沖田はドアに一発蹴りを入れた。

また派手な音を立てると、ドアは嘘みたいになめらかに滑るようになった。

感心して見ていると、
行くぞ、と手を引かれる。

まだ消えない煙草の白い煙が、夕方の廊下を泳いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0189j/>

怠惰少年期

2010年10月11日05時19分発行